〔千葉医学　75：247，1999〕

〔編集後記〕

最近，大学では消防法の関係から廊下に物品をおくことを控えるよう，とりわけ消火活動上必要な装置の周辺では禁止，指導があった。本号が届く頃には，見た目もすっきりした環境になっているだろう。私どもでもこれを機に教室内の整理，整頓を進めている。学会誌，研究会誌，各種報告，商業雑誌など各人が重複，所蔵しているものにまず手をつけた。抵抗があるかと思ったが皆事情を理解してくれた。それならば，入手し，目を通した後の早い段階で思い切って捨ててしまうことも選択肢の一つであるが，記銘力の減退を考えると折角目を通した資料が手元に残らないのは困る。毎日届けられる資料を後で利用できるように効率的に整理しておきたいと願いながら，滞積する一方の資料を前にして途方に暮れているのが現実である。

しかし，エンドユーザーとしてできることには限りがある。雑誌や資料を作成し，配布する側もそのことを考えるべきではないかといいたい。たとえば，学会誌の印刷，送付に要する経費は学会の事業費の大部分を占め，財務の面から見ても学会誌発行が最大の事業であることがわかる。しかしながら，会員のもとに届けられた学会誌がいかに活用されているかとなると，費用をかけている割には寂しいものがある。思い切って，電子文書化してはどうであろうか。すでに一部の学会誌はホームページから抄録だけでなく，図表も含め全文ダウンロードできる。本誌でも中島祥夫編集委員長時代にホームページ上で抄録を閲覧できるようになっているが，これをさらに一歩押し進めるのである。こうすれば雑誌の保存は図書館などに任せ，個々の会員は必要に応じて検索し，ダウンロードし，保存できることになる。また，印刷物としての学会誌の配布を希望するかどうかはあらかじめ会員にアンケートを取り，配布を望まない会員には印刷物を配布しないことで，森林資源の浪費を防ぐことにもなる。このことにより額は多くないであろうが，印刷費，郵送費も節約できるだろうし，なによりも，資料の整理に頭を悩ますことがなくなる。読者にとって，本誌の良さは専門領域に偏りがなく横断的性格を持っていること，タイムリーな内容の総説，記載が正確で丁寧な原著，千葉医学会ならではの会員からの投稿などであり，後で読みたくなる，参照したくなる内容が少なくない。携帯端末の普及は加速度的に進んでいる。21世紀に通用する千葉医学雑誌のあり方を考えてはどうだろうか。

（編集委員　栗山喬之）